

編集後記

リハビリテーション医学会の専門医・認定医制度は順調に発足し、今春新たに20名の専門医と44名の認定医が認定されたが、巻頭言で安藤正孝氏が指摘されているように、リハビリテーション医学の講座の設置は4大学にすぎず、また、リハビリテーション診療科の標榜も未だ許されていない。リハ医学に志す者にとっては、安藤氏のご指摘のように一日も早く達成したいことである。

特集は先月にひきつづいての、内部障害のその2である。最初の3篇は身体障害者福祉法で内部障害としてとりあげられている、心臓機能障害、腎臓機能障害、肺機能障害について、身体障害者福祉審議会審査部会委員の大国真彦氏、小高通夫氏、砂原茂一氏にそれぞれ、障害程度等級の現況と問題点を解説していただいた。身体障害を等級づけし、それに応じて補償をすることになると、等級づけは大変難しい問題であるが、これら内部障害の障害程度等級づけに関しても色々な問題点が存することが明らかにされた。

心臓機能障害に関して大国氏は、2級がないことに問題があること、および心疾患と四肢機能障害あるいは腎疾患の合併の際にどのように判定するのかははっきりしないことを指摘された。

腎機能障害に関して小高氏は、内因性クレアチニンクリアランスを調べなくとも、血清クレアチニン値のみで判定は可能であると

し、また、透析療法の適応となる慢性腎機能障害者は現状ではほとんど3級になるのだが、すべて1級として認定してよいのではないかと提言された。

砂原先生は内部障害の尖兵としての肺機能障害評価の歴史から述べられ、最後に、わが国の各制度の障害評価の体系はリハビリテーションに対する何らの考慮も払っていないこと、また、障害者福祉のあるべき姿として訓練や装具などの現物給付を優先すべきこと、およびその結果、等級が下がるのが喜びとして受けとられるような仕組みが望ましいことを指摘された。

先月につづく内部障害のリハとして、大坪修氏の腎移植の現況についてと、太田和夫氏の人工透析とその適応については、ともに腎機能障害のリハを理解する上で大変有益な論文である。

さて、先る3月29日に身体障害福祉審議会から「今後における身体障害者福祉を進めるための総合的方策」について厚生大臣に答申が示されたが、その委員の一人である今田拓氏の解説を掲載した。今田氏の意見がかなり色濃く前面に出ているので、答申と並べて読むことによって興味は倍増することと思われる。

いよいよ猛暑の季節に突入する。読者諸兄の益々の御健勝をお祈りいたします。

(横山 巖)

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
小 池 文 英
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
水 野 祥 太 郎
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
緒 方 甫
荻 島 秀 男
加 倉 井 周 一
賀 集 竹 子
河 邨 文 一 郎
小 島 蓉 子
五 味 重 春
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
沢 村 誠 志
高 田 玲 子
高 橋 勇
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
橋 倉 一 裕
長 谷 川 恒 雄
林 玉 子
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)

次号予告(第10巻 第8号)

特 集	国際障害者年をふりかえる			
	国際障害者年における国際連合総会の状況		日本女子大・文学部	小 島 蓉 子
	長期行動計画が投げかけている			
	新しい課題		小児療育相談センター	飯 田 進
	精薄者のためにどうであったか		全日本精薄者育成会	皆 川 正 治
	重度障害者の雇用と所得保障はどう進んだか		センコロ	調 一 興
	難病患者にとっての国際障害者年		全難連	佐 藤 エミ子
	心疾患のリハビリテーション		三楽病院	伊 藤 良 雄
	動的立位バランスの簡易測定法		名大病院	伊藤不二夫・他
	重症心身障害者の移動能力に影響する知的・身体的要素について		川崎中央病院	白 野 明
巻 頭 言 研究と報告	Duchenne 型筋ジストロフィー症患者のエネルギー代謝		熊大・第一内科	山 永 裕 明・他
	振動障害患者の末梢神経障害：上肢神経伝導検査の経時的変化		慶大・リハビリテーション	椿 原 彰 夫・他
	リハビリテーション医学の評価法7：高次神経機能の評価：失語		都老人研・言語	綿 森 淑 子
	反射1：医学的リハと反射		東北大・鳴子分院	中 村 隆 一
	社会リハビリテーション7：障害者の社会自立		北海道リハビリ	西 村 秀 夫
講 座				
一 頁 講 座				